

報告事項カ

第1回鳥取県美術館整備基本計画策定アドバイザー委員会及び
平成29年度第2回鳥取県立博物館協議会の概要について

第1回鳥取県美術館整備基本計画策定アドバイザー委員会及び平成29年
度第2回鳥取県立博物館協議会の概要について、別紙のとおり報告します。

平成29年9月6日

鳥取県教育委員会教育長 山本 仁志

第1回鳥取県美術館整備基本計画策定アドバイザー委員会及び
平成29年度第2回鳥取県立博物館協議会の概要について

平成29年9月6日
博 物 館

第1回鳥取県美術館整備基本計画策定アドバイザー委員会及び平成29年度第2回鳥取県立博物館協議会を開催しましたので、その概要等について報告します。

記

1 第1回鳥取県美術館整備基本計画策定アドバイザー委員会

(1) 委員名簿

氏名	役職等	分野
林田 英樹	日本工芸会理事長、元文化庁長官、元国立科学博物館長、元国立新美術館長	全般
水沢 勉	神奈川県立近代美術館館長、県立博物館美術品収集評価委員	美術
加藤 哲英	鳥取県美術家協会会長	文化活動
池本 喜己	写真家	文化活動
五島 朋子	鳥取大学地域学部教授（附属芸術文化センター）	文化活動
稲庭 彩和子	東京都美術館アート・コミュニケーション係長 学芸員	教育普及
塚田 美紀	世田谷美術館学芸部企画担当主査 学芸員	教育普及
高増 佳子	米子工業高等専門学校、准教授	建築関係
吉村 寿博	吉村寿博建築設計事務所代表 (一倉吉市出身の建築家。金沢21世紀美術館の設計当時、プロジェクトリーダーとして従事。)	建築関係

(2) 日時 平成29年8月4日（金）午後1時から午後4時まで

- ・午後1時～ 県立美術館建設予定地視察
- ・午後2時～ 第1回鳥取県美術館整備基本計画策定アドバイザー委員会

(3) 場所 エキパル倉吉 多目的ホール

(4) 主な意見等

- ・意見交換に先立ち、委員会の座長に林田英樹氏（元文化庁長官）を選任し、林田座長から、鳥取県にふさわしい美術館の基本計画となるよう、委員全員が、専門的な立場で幅広い意見を出していきたいとの挨拶があった。

《基本構想等》

- ・基本構想は、鳥取県美術家協会が希望する内容がほとんど網羅されている。誰でも来やすく、非日常的な時間が過ごせ、今の子どもたちが大きくなった時に、自分たちはこの美術館に触れて育ったと感じてもらえるような美術館としてほしい。
- ・10年後には、技術や、子どもたちが感動するものも大きく変化している。そうであれば、10年後の美術館の在り方をもっと大胆に考えていくことが必要ではないか。（例えば、入口のない建物を作る、収蔵品を展示する代わりにモニターで国内外の美術品を見せる展示品のない美術館、3Dプリンターで展示物を作成する、図録の代わりに来館者がそれぞれ欲しい説明をプリンターから印刷等）
- ・今の基本構想は、来館者を文化の消費者として捉えている部分が気になった。例えば、目の見えない人とともに作る音声ガイドは、見える人にとっても格段に分かりやすい。ユーザー側に「宝」があるという認識のもとで基本計画（案）の書き振りを書き換えるだけで印象が変わると思う。
- ・金沢21世紀美術館が成功した一番の理由は、街中の賑わいを取り戻したいとの市長の強い思いのもとで、建築としての魅力だけではなく、魅力を引き出すための学芸員、事務局としての市役所職員のそれぞれが専門性を発揮して、うまくまとめていた点にある。設計者、館長、学芸員など出来るだけ早く体制を確保して、議論していくことが重要。

《事業活動等》

- ・誰でも利用しやすい美術館とするためのツール（建物のハード面、また拡大表示やベビーカー、だれでもトイレ）がどのように活用されるかは、コミュニケーションによるものと感じている。職員と県民を含めたサポート、共助のシステムの構築が必要である。
- ・美術ラーニングセンターの役割を有する既存の美術館はないため、新美術館の特色として挙げてよいと思う。
- ・東京都美術館では、美術館を美術と教育の場から福祉・集い・コミュニケーションの場に広げることが重要と意見があってアートコミュニケーション事業を開始した。学校での美術教育からの解放、学びのコミュニケーションへの内包によってアートに関心を持つ層が広がることから、美術ラーニングセンターの名称についても、もっと広がりを持ったものでもよいのではないか。
- ・福祉・コミュニケーションを含めるのは面白い視点である。倉吉市は人口に対する病院比率が大きいと聞いており、福祉が充実している県の特性を活かした切り口を含められるとよい。
- ・県内の小学校3（4）年生を1回連れてくるというのは少ないと感じる。美術館に行く行為は一種の習慣・経験であると感じているため、せつかく県の中央部に作るのだから、小学生・中学生は1年に1回来館するような試みにすべきではないか。そうすれば、学校現場での負担も解消できて効果的である。
- ・新美術館の無料化を考えるのはどうか。無料にした上で新美術館がどれだけの事業ができるか考えてはどうか。
- ・障がい者の作品を公募・展覧し、白壁土蔵群の商店主が街中にある自らの店で展示して障がい者の芸術活動を推進する。このような取り組みを通して、美術・美術館への関心が増えるのではないか。
- ・アーティスト・イン・レジデンス事業は美術館のセキュリティから切り離さないと作家が24時間滞在できない現実があることから、白壁土蔵群など周辺地域との関与の仕方が考えられる。どのように具体的に町とかかわるかは現段階から考えるべきである。
- ・ボランティアスタッフや友の会の存在は重要である。現段階からどのようにボランティアに関与してもらえらる仕組みを作るかが重要である。

《賑わいづくり》

- ・巨額の投資をする以上、公的施設としては賑わいが求められると思っている。美術館には多様な役割があるが、どのように賑わいの拠点とすべきかを建物・活動の検討の中で考えてもらいたい。
- ・展示の鑑賞有無にかかわらず地元住民が来館するような使い方ができるようなオープンさが必要である。県民に愛されることが肝要であり、「時間があるから県美に行こう」と思われるようにすべきである。
- ・全面無料化は難しいものの、対象層ごとの無料日を増やすなど、自分自身が美術館に来てもらいたいという対象とされている（「ウェルカム」されている）仕組みを作り、来館者自身が美術館と関わると感じるということが重要である。

《美術館の建物》

- ・美術館の建物が美術的な価値を有し、県内外・国内外から建築を見に来館してもらえようになればいいと思う。そのため、設計者をどう決めるのか、もしくは著名な建築家に依頼するのかなど、建物の価値を考慮してほしい。

《整備手法》

- ・PFI手法での整備・運営は、経済原理ばかりに頼ってしまい、建物自体の価値が高められない、自由な展示ができないのではと懸念する。
- ・PFI手法は設計の自由度を下げると感じている。新美術館も設計段階はプロポーザル方式にすれば魅力的なものになり、多くの案が集まると思っており、PFI手法を導入する

ならば設計段階で十分検討ができる形のものとするべき。一般的なPFI手法では月並みな設計しかできないと感じている。

(5) 今後の対応

- ・次回の委員会を10月末～11月を目途に開催し、基本計画（素案）に対してアドバイスをいただく。
- ・基本計画（素案）の作成に当たっては、今回の委員会での意見を整理した上で、より詳細な検討を行うため、改めてアドバイザリー委員を戸別訪問してアドバイスをいただきながら進める。

2 平成29年度第2回鳥取県立博物館協議会

(1) 日時 平成29年8月28日（月）午後1時30分から午後4時まで

(2) 場所 鳥取県立博物館会議室

(3) 議題 鳥取県立博物館改修基本構想などについて

(4) 主な意見

《平成29年度博物館事業の実施状況について》

- ・リーチ展のまとめで、小中学生が少ないこと、ゆかりのある島根県からの来館が少ないとあるが、分析は企画展が終わってから行ったのか、途中での対応はどうしたのか。
→小中学生が少ないことは開催途中でわかったが、年度当初で運動会等他の行事とも重なり、対応が難しかった。島根県への訴求は、タイミングが遅く後手に回ってしまった。
- ・博物館資料アドバイザー派遣事業について、アドバイザーが歴史・民俗の分野に偏っているが、美術のアドバイスができるのか。
→加盟館に希望を聞き、要望があったのが歴史・民俗系の資料館であった。今年度はこの分野中心に対応していくが、次年度以降も要望を踏まえて拡充などを考えることとしている。
- ・県外からの来館者はどのように把握しているのか。職員では気づかないことを書いてもらえるので、アンケートは重要である。
→来館者の把握はアンケートによる。ただ、現行のアンケートは、設備、常設展、企画展をまとめたものなので、どの展示に対する意見なのかわかりにくい面もあるので、工夫が必要だと考えている。

《鳥取県立美術館整備の検討状況について》

- ・アドバイザリー委員会に中部の方がいないのが不安である。県民の声はどこで反映させるのか、意見の言いっぱなしにならないようにしてほしい。
→基本構想策定時に東・中・西部の方に委員になっていただき、意見はよく聞いている。基本計画策定に向けては、全国の美術館の状況を把握されている方や教育普及に力を入れられる方などを中心に委員になっていただいている。
現在、文化団体等の意見を聞いて回っているところでもあり、今後も意見を聞く場は設けていくこととしているし、いただいた意見への対応はオープンにしていくこととしている。

《鳥取県立博物館改修基本構想について》

- ・鳥取市が美術館を設けるとの報道を見たが、鳥取市が美術館を作ってもこの改修計画は活かすのか。収蔵スペースは変わらないか。
→博物館の改修は美術機能が出て行った後になるが、現時点で考えられることをもとに改修計画を作成する。実際の改修では、その時点での状況を踏まえた見直しは必要である。審美師等の収蔵に必要なスペースは最大でも収蔵室一部屋程度と考えている。大切な作品を次世代に適切に伝えるためには、原則として、より管理レベルの高い美術館での保存が適切である。
- ・歴史・民俗常設展示室で展示できていないものがある。そこに異質な美術を入れることに違和感がある。鑑賞の作法も違うと思う。

→人文の常設展の中に、現在でも美術・民芸作品の展示も行っており、その充実を図る。鳥取藩の歴史を語るにあたり、適当な藩絵師の絵を飾る。美術が出ることで、企画展での展示室利用を行える期間が長くなるので、そこの充実も併せて行っていく。

- 同じ展示では飽きるので、作品は倉吉に置いて、一括して企画展時に持ってくればいい。必要最小限の収蔵では企画展では足りない。博物館で企画展示するのに博物館に収蔵してある必要はなく、一括した管理の方が適切ではないか。

→いずれにしても県が所蔵するのであり、運営上の工夫で考えていくが、一定の保存場所は確保しておきたいとの考えである。日本画は繊細で頻繁の移送に抵抗があるものもある。どのような工夫ができるかは運営の中で考えていきたい。

- 学芸員の配置はどう考えているのか。作品が残るのなら学芸員の配置も考えるべきと思う。→学芸員の配置については、これから考えていきたい。

- 多目的スペースの計画で100人以上は入れるのはありがたい。小規模校は学校全体で、大規模校なら学年ごとに利用できる。遠足等で鳥取城周辺エリアを目的として考えやすくなるので良いことである。

→今の講堂は、バリアフリーの問題で使いにくい点がある。フラットなスペースでワークショップも開催できるように考えている。

(5) 今後の対応

- 今回提示した案には、概ね理解をいただいたことを踏まえて、この案を前提に、運営費や運営方法、整備手法等について検討し、次回協議会で意見をいただく。